

5.家のつくり

著者	浜中 香織
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	23
ページ	41-52
発行年	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/9708

5. 家のつくり

浜 中 香 織

1. はじめに
2. 伝統的な家の特徴
3. 「家」と環境、日常生活との関わり
4. 「家」のつくりの変遷とその背景
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

西谷地区の調査実習初日、「しょうぞく」という言葉を聞いた時は何のことだか全く分からなかった。「玄関にある大きな木」と聞いて想像したのは、屏風のようなものだった。しかし実際に見てみると、それがこの地域独特のものであるらしいことがわかった。このときから私は、「西谷地区の家」について興味をもつようになった。

私の実家は核家族で、15年ほど前に建てた、今日日本で広く見られるコンクリートの外壁の家に住んでいた。そのため、この西谷地区に残る昔ながらの木の家はどれも珍しく、興味をひくものであった。日本の社会・経済が発展して、均質化した家が全国で見られるようになる以前は、伝統的な家とは、その土地にあるものを使い、その土地の環境に適したつくりになっており、その土地の人々の生活を反映し、また作り出すものであった。ここでの調査実習を通して、改めてそのことを実感した。

人が心や体を休め、住む場所である「家」が、この西谷地区ではどんな形態をなしているのだろうか。西谷地区の伝統的な「家」を、環境と、人々との関わりあいに着目して、その変遷ともに見て行きたい。

2. 伝統的な家の特徴

戦後の好景気に伴い、全国的に住宅建設ラッシュ（1960～1980 ぐらい）があった。ここで言う「伝統的な家」とは、この時に建て替えがなされる以前に多く見られた、現代的な家よりも地域の特色を多く有しているもの、と考えることにしたい。我谷ダムの建設（1961 年着工）、三八豪雪（1963 年）なども、この西谷地区では住宅の建て替えに影響した。その時建て替えを行なわなかった家や、改築されただけの家などの家を中心に調査し、また以前の家について聞き取りをしていった。ここでは、住む家そのものと、門や土蔵など付属して外に作られるものも一緒に考えたい。まずはその「伝統的な家」の特徴を、以下の項目にわけて順に述べていく。

項目：構造／屋根／材質・柱／床・壁・しきり／しょうぞく／部屋／囲炉裏／仏壇 ／雪囲い／土蔵／石垣・門

〈構造〉大抵どの家も大きめの2階建てで、“田の字型”と呼ばれる造りが基本になっていた（クズヤの場合、土間の上部だけ二階はない）。これは、その名の通り家の間取りが長方形あるいは正方形の“田の字形”になっており、縁側や押入れがほとんどなく、部屋の間の戸を外すことで柱を残しながら大きな広間を作ることが出来る造りである（図1参照）。1階が生活の場で、2階は主に物置として使われ、仕切りがないことが多い。クズヤの場合、窓はほとんどなかった。

〈屋根〉最も古いのがカヤ葺きで、“クズヤ”とも呼ばれる。O氏（80歳代、男性）によると、五箇山などでは切妻造¹⁾が見られるが、この辺りでは入母屋²⁾の、“兜作り”と呼ばれるものが多かった。クズヤは葺くのに大変な労力と資金が必要で、家の中は埃っぽく、暗くなった。長い間使っていると腐って落ち、屋根に穴が開いた。冬に痛むので、春に修復をしていた。また西谷には長持ちする“コバ葺き”といわれる屋根もあった。栗の木を薄く割ると、縦にうまく割れるので、それを納屋や下屋（ゲヤ）³⁾などの簡単な屋根に用い、竹を置き、石で押さえた。雨に強く、10年ほどもった。“杉皮”も納屋などに用いられることがあった。1m×2mほどの大きさと、丈夫さはなく、5年ほどで交換した。瓦屋根も次第に増え、いくつかの屋根の種類を併用する家も多く見られた。

〈材質・柱〉けやきが一番丈夫で上質であり、多く、柱などに使われた。他には栗や松が使用された。柱は7寸（約21cm）角ほどで、大きな家は8寸角で、かなり太かった。天井や柱、床が漆塗りされている家もあった。

〈壁・床〉 仏間や寝起きする場所以外は板張りであることが多く、囲炉裏の周りにムシロ、その上にゴザなどをひいてすませた。

〈しきり〉 引き戸として、襖ではなく木で作られたものが使われていたりした。戸の真ん中部分が朱で塗られ帯のようであったため、“帯戸”と呼ばれた。また鴨居上にある欄間には、立体的な木々や鳥が作られている家が多い。これは和紙に漆を染み込ませ、木の質感を出して作る“立体欄間”と呼ばれるものである。

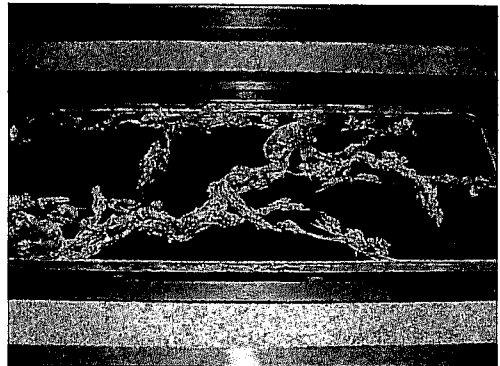


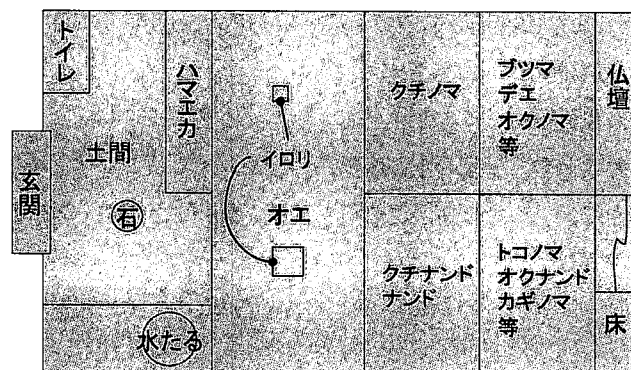
写真1 立体欄間

〈しょうぞく〉 “ハリ”ともいい、鴨居の上あたり、特に玄関と部屋の間戸の上の壁に、横に走って見える、幅70cm、厚さ20cmくらいの太い木のことである。家を頑丈にすると同時に、普通の家では見せない部分を飾りとして見せている。けやきが一番よい素材とされ、松も使用される。朱っぽい色がつく「ベンガラ」の上に、漆を塗って仕上げている。



写真2 しょうぞく

図1 家の間取りと名称



(間取りより、筆者作成)

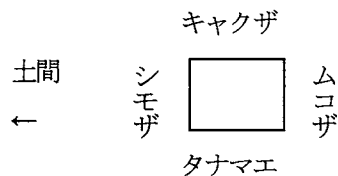
〈部屋〉調査で見た古い家では、屋根のあわせてある面が玄関になっていた（妻入りという）。家に入るとまず土間がある。“ハマエカ”とは玄関で一段高くなったところで、木が渡されており、腰掛になったりする。階段はあるとすればこの辺りにあることが多い。

“オエ”は居間に当たる部分で、二つに仕切られていることもある。その後ろに6～8畳間が2部屋、あるいは4部屋があり、家々によって違いはあったが、図1のような名前と呼ばれていた。食事はオエで行い、主に寝室となったのはクチナンドであった。

〈土間〉水たるなどがおかれ、台所としての役割をもつ他、作業の場としても使われたため、広い。大きな石が半分地面に埋まって置かれており、冬仕事としてこの上でわらをたたいた。トイレと、稀に風呂をもつ家もあった。厩があることも多かった。

〈囲炉裏〉

図2 囲炉裏の座の呼び名



西谷地区では多くの家が二つの囲炉裏をもっていた。囲炉裏の上の天井部分は“天（あま）”といい、天井をすのこ状にして煙を逃がすようになっていた。二階部分で材木を乾燥させたり、保存食を置いておいたりした。さらに屋根の上に小さな屋根をつけ、“煙出し”とよばれるところから煙を排出した。二つある囲炉裏のうち一つは来客があった時のためだけのもので、年に数回しか使われなかった。また西谷地区の中でも違いはあるが、囲炉裏の四方の座席にはそれぞれ名称があり、家族の座る場所がおおよそ決まっている。

キヤクザ…来客が座る。ヨコザ、ともいう。

ムコザ…一番年上や、一家の主が座る。

シモザ…タキモン、つまり薪がこの後ろに置かれ、また土間に近いので、食事を用意したりする母親が座る。カカザ、ともいう。

(O氏、80代、下谷の男性の話)

〈仏壇〉必ず家の一番奥にあり、玄関とは反対の側の奥であることが多い。この地域は襖2枚分の非常に大きなもので、豪華である。仏壇の後ろの家の外側に扉がついており、火事の時には一

番に取り出せるようになっていた。

〈雪囲い〉“クズヤ”の場合、冬に家の保温性を高めるために「雪囲い」を行い、春になるととった。背丈ほどのススキや4~5メートルのカヤを山で刈ってきて束を作り、家の外壁を囲み、竹で密着させた。ベニヤ板やトタンを使うこともあり、その場合は年中つけてあった。

〈土蔵〉どの家も持っていて、家から離して作られた。昔はコバの屋根であったが、後に泥を塗り、瓦を葺いて二重にするようになった。厚い壁を持つ。一階にもみ、みそ、漬物などの食料、二階には衣類が保存された。

〈石垣・門〉菅谷地区など、自営業（木地、機、漆器など）で余裕のある家屋には石垣や門があったが、西谷地区全体ではほとんどがもっていなかった。

3. 「家」と環境・日常生活との関わり

気候、土地、儀礼・集会、宗教、仕事・作業、日常生活の項目に分けて、それらが家のつくりに応じた影響を与え、また家での人々の生活がどんなものであったのかを述べたい。

〈気候〉この地区は北陸の山に囲まれた地域であるため、冬の積雪量は多い。寒い日には囲炉裏で火をたくと、家中が暖かくなったという。またカヤ葺きの屋根は、冬は暖かく、夏涼しかった。さらなる保温性を保つために、冬には雪囲いをした。瓦屋根は雪下ろしの際割れることがあるという欠点がある。雪下ろしの際不便なため、縁側は作られないことが多かった。また「しょうぞく」は2メートルの積雪に耐える頑丈な家を作るという役割を果たしてもいる。

また冬は山にも入れず、他との交流も難しくなるため、食料を確保することが重要であった。そのため囲炉裏の上で保存食が作られたり、土蔵に食料が保管されたりした。土間が作業の場としてあるのも、冬の仕事場として欠かせないからである。厩が土間にあったのも、積雪時のことを考えてであった。

夏場に涼しさを保てるように、多くの部屋が板張りのままであった。

〈土地〉山を持つ人が多い北陸地方は、立派な家が多い。この西谷地区も山の中であったので、家の材料となる木は豊富にあった。けやきや、特に多かった栗の木もよく使われた。杉は腐りやすいが、栗の木は丈夫で長持ちした。木地師や“山師”と言われる木を扱う職業の人が多く、家

を作ることにこだわりが強かったと考えられる。柱が通常よりかなり大きな8寸角であったり、「しょうぞく」がどの家にもあったりしたことなどから分かる。「一つの自慢で、見栄でもあった。人の家に行くと、柱などとあわせ、まずほめた」というS氏（70歳代、男性）の話からも分かる。

一方カヤがそれほど多く採れる土地ではなかったらしく、カヤ葺きに大変な労力とお金がかかったことと合わさって、戦後にはほとんどの家が瓦葺に変わっていた。小松の栗津には瓦屋が多くあり、瓦はそこから入手された。栗津では赤い瓦が作られていたため、赤い屋根が多かった。また漆器が盛んであったためか、しょうぞくをはじめ、柱や天井などにも漆が塗られていた。塗るための費用は高かったが、5、6回重ねるのが普通で、こうすることにより長持ちした。ハエがフンをつけてもふき取りやすかった。

お風呂がほとんどの家になかったのは、井戸から水を運ぶのが大変だったことも大きい。我谷では「もらい風呂⁴⁾」を10日に一回ほどして済ませていた」（N氏、80歳代、男性）らしい。

もともと火事が多かったこの地域では、丈夫な土蔵が、家から離して作られた。そのため、大きな火事があっても土蔵だけは被害に遭わなくなった。

〈儀礼・集会〉山中町など、町の家は小さかったため、公民館のような人が集まれる場所が作られたが、この地域では、冠婚葬祭をはじめとする様々な儀礼、あるいは集会は家の中で行なわれた。大きな家で、戸を外せば50畳ほどの大きな広間となる“田の字型”の作りになっていたのはこのためであった。結婚式の時にはブツマの一番奥に新婦が座り、オエの方に向かって両親、親戚、と順に座っていった。どの家庭でも、来客のための食事には、土蔵にしまってあった沢山の漆器が使われた。お葬式の際も同様である。遺体はブツマに安置された。また、地区の寄り合いは各家を順に回って行なわれた。人が集まった際には、普段は板や畳をはって使うことがない二つ目の囲炉裏が使われた。来客の時のためだけのこの囲炉裏には、特別に木炭が使われた。

〈宗教〉この地域では浄土真宗が主に信仰されており、人々の信仰心は厚かったようだ。“お講”と呼ばれる信者の会合が多くあり、それが民家で行なわれることもあった。その時も、大きな広間が使われたのである。そうして家の中で仏教の儀式が行なわれ、見られる機会が多かったためか、信仰心の厚さからか、この地区の仏壇はとても大きく、豪華である。襖二枚分の幅があり、オエから見てもその立派さは十分分かった。このような豪華な仏壇が作られたために、火事の際に真っ先に取り出せるように、この裏側にわざわざ戸が作られたという。「(我谷のダム建設で)まとまった補償金が入ると、まず仏壇を買った」というN氏（70歳代、男性）の話からも、人々の仏壇に対する思いがよく分かる。また、お葬式やお講などでお坊さんが来る機会があると、特別な存在として、普段は使わないカギノマを控え室や寝泊りの場所として提供とした。また家の

裏にお坊さんだけが使うトイレを作った家もあった。

〈仕事・作業〉「木地をしていた時、囲炉裏の上の“天（アマ）”を乾燥場所にした」とK氏（50代、男性）は言っていた。納屋がなかったために、土間でわら作業などをした。寒いので、囲炉裏のあるオエで作業することもあった。

〈日常生活〉Tさん（80歳代、女性）の話によると、嫁となった人は朝5時には起きて毎日家の掃除をしてから仕事に出たそうだ。囲炉裏があったために汚れやすく、大きな家を掃除することは大変だったらしい。週に1回は固く絞った雑巾で漆の塗られた柱や天井も磨いたという。漆が塗られているため、今も磨けばきれいにはなるが、もうやりたくはない、と言っていた。また、N氏（70歳代、男性）によると、板張りの灰の葺き掃除は女の子がする仕事であった。囲炉裏の周りが家族の団欒の場で、炊事なども全てここで行なわれた。来客があったときには囲炉裏のキャクザに座らせた。

4. 家の造りの変遷とその背景

3節の冒頭にあるとおり、これらの伝統的な家の多くは戦後20～30年ごろ、家の老朽化が進んだこと、また山に木を所有していたものは特に、好景気をうけ住宅建設が進んだ。戦後は杉が売れ、財産を作ることができたらしい。この頃から現代的な家が増加した。調査に行った時に伺った家の多くはこの頃建てられた家だと思われる。しかし40年～30年ほど前になるので、とても新しい、というわけではなく、瓦屋根で、外壁は木材などが多かった。

S氏（70歳代、男性）によれば、昔の家は「言ってしまうと、不便だらけ」であった。Tさん（80歳代、女性）の話からも、その苦労はよく伝わった。押入れがなく二階に行って荷物を出し入れしなければならなかったり、炊事には台所となる場所と囲炉裏を往復しなければならなかったり、部屋が少なかったり、などなど。子ども部屋をもっていればぜいたくな方で、家族はいつも同じ部屋にいるしかなかった。囲炉裏のために薪を運んでくることも、重労働であった。家を作るのにも、家族や親戚中が集まって、基礎を作ることから始めなければならなかった。カヤの屋根を葺きなおす際には、年度初めの寄合いで計画を立てることから始め、各人が縄を持ち寄り、カヤを運んで、集落総出で、一日がかりでしなければならなかった。伝統的な家のよかったところといえば、天井が高かったため、夏涼しかったこと、そして囲炉裏の周りにはいつも家族が集っていたことだけであった。

このような家であったために、建設ラッシュ時に家の支配権をもっていた人々（現在50歳代の

人)にとって、家を現代的なものに建て替えることにはほとんど抵抗がなかった。T氏(70歳代、男性)は「若い世代が、壊さなくてもよい家をどんどん壊してしまった」と語っていた。水道や電気も通り、家の中には廊下が作られ、小さな部屋に仕切られた。土間はなくなり、囲炉裏もなくなって二階にもきちんと部屋が作られた。家が家族のもの、あるいは個人のものへと変化していったといえるだろう。こうした現代に一般的な家が可能になったのも、冠婚葬祭をはじめとする儀式を家で行なう必要がなくなったことは大きい。全国的にみられる流れであるが、結婚式は家から神社やホテル、結婚式場へと出て行った。またお葬式も、セレモニーホールと言われる場所が、お客さんの接待、料理を出すところから、遺体を焼くことまで全て担うようになった。寄合いの場所としては各地区に公民館が作られ、お祭りなどの行事の拠点ともなった。またS氏(70歳代、男性)によれば「今一番お金をかけるところ」である台所、トイレも家の中に作られた。お風呂も多くの家で作られたが、近くにあるゆーゆー館⁹⁾を利用したりする家もある。

また仏壇も、徐々に小型のものが人気になっていった。戦後の好景気で豊かになるにつれ、所有する財産における仏壇の価値は小さくなり、後ろに火事から守るための扉をわざわざつけることもなくなっていった。

こうして完全な建て替えをした人が多い一方で、伝統的な家に住みながら、一部、あるいは全体的に改築だけを行なった家もあったので紹介したい。

〇氏(80歳代、男性)の場合

1937年建設で、築70年の家である。まず、40年ほど前に、煙が出るばかりで不便なだけであった囲炉裏をつぶして薪ストーブにした。このため部屋を二つにすることが出来たらしいが、「便利になる時は何も思わなかったが、今になると少し寂しい」とも言っていた。この時に二階も作ったという。そして2006年度に、大工さんの勧めで家の中を改築した。土台がしっかりしているので、骨組みは自体はまだ100年も200年ももつらしい。家の中にしきりを増やし、外にあった縁側を片側は廊下に、片側は部屋の一部にした。また炊事場を家の中に作った。骨組み自体はかわっていないから、玄関に入ると立派なしょうぞく(写真2)がまず目に入



写真3 2006年に改築された家の概観

ってきたのが印象的であった。

Sさん（70歳代、女性）の場合

建築年は分からないが、1971年に祖父の案で改築。家の真ん中に廊下を通し、孫のことを考えて一階の隅に子ども部屋を作った。当時の地区内では珍しく、お風呂を作った。52畳ほどあった2階はそのままで、大広間として年に数回の仏事の時に用いたが、あとは結婚式の際に結納の品を並べたくらいで、使わなかった。それも今では子ども部屋になり、使いやすくなった。また6年前にも改築をし、台所、風呂場、茶の間、トイレが新しくなった。使いやすくなった家のことをうれしそうに話していた。

K氏（50歳代、男性）の場合

築95年以上で、二つの囲炉裏をもつ家である。一つの囲炉裏はそのままだに、もう一つの囲炉裏の上には畳が張られ、居間となっていた。囲炉裏の上の“天”はなくなり、天井が張られていた。この家はかなり大きいですが、それは昔、土間で雑貨屋を営んでいたためでもある。山奥の人が仕事をしに街へ降りてきて、その帰りに土間で一服したり、調味料を買って帰ったりした場所であったらしい。その土間は3回ほど張り替えられたあと、50年ほど前に床張りになった。15、6年前には階段を直して、柱しかなかった二階に行きやすくし、部屋も作り、現在では子ども部屋になっている。仏壇は代々使われており、大きくて、きらびやかなものが家の一番奥にあった。

Tさん（80歳代、女性）の場合

西谷地区で一番古く、築150年ほどの、立派な家である。片岡鶴太郎が出演する番組のロケ地となったこともあった。50年ほど前にクズヤから瓦屋根になったほか、台所は30年ほど前にタイルに、それから10年ほど前にステンレスにした。しかし家の中ではなく、昔の土間の位置にあった。また、昔は外との間も障子で、雨や雪が入り込むことがあったので、40年ほど前にガラス戸になった。その他はほとんど建てられた状態で残されており、ストーブやこたつなど、現代的な家電製品や家具を見なければ、その家の古さはしっかり伝わってきた。しかし、家について話を聞いている中で伝わってきたのは、伝統的な家の不便さや苦勞であった。カヤを担ぐことの重さだとか、炊事場でかがんで仕事をするの大変さなどである。時代が変わるにつれ、ストーブなどが現われると、その便利さに慣れるようになったらしい。子ども達は家を離れているようで、一人暮らしの身にこの家は大きすぎる、とも言っていた。しかし「家を壊したり、改築したりするお金もない」とのことだった。歴史ある家を壊すなんて、とも思っただけで、そこで生活をする人にしてみれば当然の考えであろう。子ども達が家について何かいうこともないらしい。

このように、改築をしながらも家を残している場合でも、その不便さから囲炉裏をつぶし、部屋を増やしていた。またどの家でも台所は修理されていた。家電製品が使用されるようになり、買った食品を使うことが多くなるにつれ、炊事場は土間にある必要はなくなっていったのであろう。当たり前であるが、改築の中でも残されていたのは家の土台や骨組みであった。木に詳しい人達が長い年月を使って建てた家は丈夫で、立派でもあった。O氏(80歳代、男性)は「気候にあった地元の木を使うと長持ちする」と言っていた。

5. 考察

以上で、伝統的な家と、その変遷についてみてきた。調査をしながら、またこの稿をまとめながら、伝統的な家が、本当に沢山の要素から成り立っている事を実感した。伝統的な家は生きるための、生活していくための大切な場所であって、気候、土地、宗教、社会、どの要素とも密接な係わり合いをもっていた。逆に言えばそれは、家を見ればその地の風土や人々の暮らしぶりが詳細に分かる、ということでもある。このことは、現代の家と大きく異なる点である、と私は思った。

現代の私たちの家に求められるのは快適さや見た目のよさ、いかに家族や自分がくつろぐことが出来るか、ということである。全国的に展開する企業が作るような家は、それぞれの家族が自由に選び取ったものである。だから家を見ただけでは、その家がどんな気候のどんな土地に建っていて、どんな宗教の、どんな仕事をする人が住んでいるのかを詳細に判断するのは難しい。しかし、この西谷地区の伝統的な家は、その地にあった木材で、積雪にも耐えうる丈夫な家が作られた。冬場に作業ができる土間がつけられ、囲炉裏の上や土蔵には保存食が置かれた。冠婚葬祭や集会のための大広間が作れる田の字型で、仏教儀式のための大きな仏壇が置かれた。「家」が自然の一部であり、儀式的の場でもあり、仕事の場でもあり、生活のありとあらゆる場面の一部であったのである。そこには沢山の苦勞や不便さもあつたけれど、日々に欠かせない、大切な場所であつたことには間違いない。家は休む場所、としか考えない私にとっては、この違いは大きなものであつた。「家」で生まれ、様々な節目も「家」で迎え、「家」で死ぬ…人の命の基点が、伝統的な家にはあつたように思った。

伝統的な家が生活の一部であつたことから、家の中には常に他者とのつながりが存在していたことも分かる。人を招くための田の字型の作り、見せる事を意識した仏壇、しょうぞく、来客のためだけの部屋、囲炉裏、トイレ。家がそこに住む家族のためだけに存在するものではないのである。それは家を作ることを始め、親戚や地域社会の協力なしでは生活ができなかつたことを表している。しかし、そうして家の中の家族の居場所が限られていたことは、家族内のつながり

を強めることにも役立っていた。N氏（70歳代、男性）は、昔の家の一つだけよかったところとして、「囲炉裏の周りで一家団欒ができたこと」と言っていた。現代の家は、お客さんは二の次で、まず家族が休める場所として作られているうえ、個人の部屋もしっかり用意されている。家族だけ、または個人だけの、“個”の場が重視された家であるといえよう。

家々を回る中で、私の目に映る「伝統的な家」は立派で、いつまでも眺めていたいものであったけれど、そこに住む人達にとっては違うようだった。高齢の男性には、伝統的な家の堅固さなどを聞かせてくれ、昔を懐かしむ声も多かったが、多くの人、特に高齢の女性はその不便さを思い出して苦い顔をしていたのが印象的であった。確かに、私もそこで生活するとなったら、三日ももたないかもしれない。

社会の変化によって私たちの価値観も変化し、「家」は大きく変わった。私にはどちらの家がいいとか言うことはできないが、「家」の役割が大きく変わってしまった、ということを実感した。

6. おわりに

一週間の調査実習中、毎日沢山のことを感じた。今までおじいちゃんやおばあちゃんと沢山話す機会が少なかった私にとって、沢山の苦勞を乗り越えてきて、でもすごく元気に毎日を過ごしている彼らを心からすごいと思った。そして、いつ行っても笑顔で快く迎え入れてくれて、何回も会ううちに家族のように感じることもあった。納涼の夕べのお手伝いをした時には、地域の人が集まってきて、地域で育てたものを地域の人が料理して振舞って、みんなで楽しい時間を過ごして、すごく幸せな時間だ、と思った。私はいいところしか見ていないのかもしれないけれど、苦勞を体験していないからかもしれないけれど、この地が大好きになってしまった。それはこの地に、人とのつながりを大切にする意識がずっと続いているからだと思う。それだけは、これからも続いて欲しい。

最後に、この報告書を作るにあたって何度もお話をして頂いた西谷地区の皆様に改めて御礼を述べるとともに、友人の協力はじめ先生がたのお力添えに心より感謝したいと思います。

注

- 1) もっとも簡単な屋根の造りで、棟から両方へ葺きおろしたもの。
- 2) 棟の両端から四方の隅を通り葺きおろされた「四注」と切妻とを重ねた形のもの。
- 3) 屋根の下に、一階部分と二階部分との間に取り付けられた小さな屋根。西谷地区では、この部分まで部屋を広げて作ってあった。
- 4) 風呂がある人の家に行き、風呂を借りること。

9) 1990年完成。3万円の年間パスポートで山中町の共同浴場（菊の湯）と合わせて利用できる。